

《特集・安曇野の景観をめぐる》

【論文】

農村景観は何によって構成されているのか
—安曇野景観の構成要素の分析—

渡邊 勉

【要旨】

本稿の目的は、地域住民が、何を地域の景観の構成要素として、景観イメージを作っているのかを明らかにし、そのイメージが景観の評価に影響を与えているのかを明らかにすることである。2010年におこなった安曇野市の住民を対象にした調査の分析から、第1に、地域住民がイメージしている安曇野景観の構成要素は、共通性と地域性（居住地域）があることが明らかとなった。第2に、地域住民の抱く安曇野景観イメージの違いは、安曇野景観の評価にはほとんど影響していないことが明らかとなった。

キーワード 景観構成要素、景観イメージ、景観評価

1. 景観をめぐる問題

2004年の景観法の制定以降、人々の景観への関心はますます高まっている。それにともない、数多くの自治体が景観計画を定め、景観の保全・形成を計画的に促進することを目指した景観行政団体へと移行している¹⁾。2011年10月1日現在、全国で516団体が景観行政団体に移行している²⁾。しかし、景観維持、保護をめぐるのは合意の難しさが常に存在する。

その理由は、大きく2つあるだろう。第1に、景観という財のもつ性質がある。景観は、公共財であると同時に私有財でもある。景観を形成している要素は、山や川といった個人の所有ではないものと、農地や家、建物など個人所有のものがある。つまり、景観は誰のものであるのかについての合意がとりにくい（栗本 2005; 渡邊 2008, 2009a, 2009b）。例えば、2007年に信州大学人文学部社会・情報

論講座が行った調査（2007年安曇野調査）

（村山・渡邊編 2007）によれば、塀の作りや庭木の種類などに規制をすべきかについては、賛成が約54%、反対が約46%とほぼ二分している。農地の用途変更についての規制についても、賛成約55%、反対が約45%となっている。つまり、景観のために個人の権利を放棄するかどうかについては、一致した世論が市民の間に形成されているわけではない。

第2に、景観のもつ価値の多様性がある。景観の価値は、単純にお金に換算できるものではない。共通した尺度によって測れるものではなく、その評価は多様とならざるをえない。そのため、ある景観に高い価値をおく人がいる一方で、高い価値を認めない人もいる。2007年安曇野調査では、安曇野の景観維持のためにいくら寄付ができるかについて尋ねたところ、500円以下が2割程度であった一方で、5000円以上と回答した人も約1割いたのである。

このような、景観をめぐる合意の難しさの背景を、本稿では、より詳しく探っていきたい。特に景観のもつ価値の多様性に着目し、その内実を明らかにすることを目的とする。

具体的には、安曇野市民に対しておこなった調査から、安曇野の景観とは何であるのか（景観イメージ）を明らかにし、安曇野の景観イメージが安曇野の景観評価をどの程度規定しているのかについて検討していく。

安曇野市は、5町村が合併して2005年に誕生した新しい市である。合併前の2町（穂高町、豊科町）には景観を規制するルールがあったが、残りの3町村（明科町、三郷村、堀金村）にはそうしたルールはなかった。旧穂高町では、2003年に「まちづくり条例」を制定し、景観の保全をおこなってきた。条例の前文には、「穂高町は、点を衝く北アルプスを背景に、緑豊かな自然環境と清烈な水の流れなどに代表される優れた景観に恵まれ、個性豊かで創造的な文化と多くの産業とが調和した光と水と緑が満ちあふれる美しい田園都市として日々発展を続けている。…私たちはこれを受け継ぎ、将来に向けて継承していかなくてはならない」と書かれており、旧穂高町が景観保全に積極的に取り組んでいたことが伺える。一方旧豊科町では、1971年に都市計画法に基づく区域区分を導入している。ここで区域区分（通称「線引き」）とは、都市計画区域を、「市街化地域」（市街化を進めることができる地域）と「市街化調整区域」（開発行為は原則として抑制され、都市施設の整備も原則としてできない地域）に分け、計画的な都市づくりを進めていくための枠組みである。この区域区分により、開発を抑制し、景観保全をおこなってきた。

このように地域によって景観をめぐる制度が異なるため、安曇野市では合併後、景観計画策定委員会や景観計画審議会、制度設計委

員会などで、議論を進めてきた。2010年9月に安曇野市景観条例を公布し、11月に景観行政団体に移行した。そして2011年には安曇野市景観計画の運用が開始されている。

こうした経緯の中で、信州大学人文学部社会学研究室では、安曇野市において景観に関する調査を数年間にわたっておこなってきた。2006年には地域住民、観光客、観光関連業者の方々を対象に、景観の価値と評価に関する調査を実施した。調査からは、安曇野の景観の重要性について、地域住民は高い評価をしていることが明らかとなった。また景観維持のために寄付をすると回答している住民の比率も高い。つまり、景観の価値について、安曇野市民は高い評価をしている。それは2007年安曇野調査でも同様であり、安曇野市民にとって安曇野の景観は高い価値を有する財であることが確認された（村山・渡邊・祐成編2008）。

しかし、調査の結果を分析していく中で、人々が安曇野の「景観」として同じ風景を想起しているのかという景観イメージの同定という問題が浮かび上がってきた。実際2007年調査において、旧5町村の市民の間のさまざまな意識の違いが明らかになっていた。安曇野といっても山もあれば、川もあり、田もあれば、畑（りんご畑）もある。5町村が合併したことから、安曇野市は地理的に広い範囲を含み、何が安曇野の景観なのかについて、市民の間に共通したイメージがあるのかどうかという問題が出てきた³⁾。

そこで、2008年に安曇野市の区長の方々に安曇野らしい風景の写真を撮っていただく調査をおこなった（村山・祐成・渡邊 2010）。調査の目的は、安曇野らしい風景、景観とは何かを明らかにすることであった。この調査からは、さまざまな安曇野景観の存在が明らかとなり、その多様性を発見することとなっ

た。区長の方々に撮っていただいた866枚の写真の中には、さまざまな景観が映し出されていた。主だった要素を抽出して分類しただけでも、23の要素が含まれていた。いわゆる田園風景、わさび田、空、山脈といった観光ガイドに載っていそうな「安曇野らしい」要素から、森、山村、屋敷林、道祖神などの要素が含まれていたのである。この調査からわかったことは、安曇野の景観の共通性と多様性であった。空や田園風景、山脈といったいわゆる「安曇野の景観」として、我々がまずはじめにイメージしそうな景観が挙げられる一方で、山村集落や森といったあまりイメージしない景観までが含まれているのである。

2007年の調査までは、安曇野の景観としてイメージされるものが共通していることを前提とし、その上でそのイメージとなる景観をどのように評価し、維持していくかということの問題としていた。しかし、2008年の調査からは、地域住民が想起している「景観」の多様性が明らかになったことで、景観イメージと景観評価の関係について、あらためて検討する必要が出てきたのである⁴⁾。

以上の調査結果から、景観イメージに関して考えられる仮説は、大きく2つあるだろう。

第1は、人々の景観のイメージは異なる、というものである。普段見ることのできる景色や風景が異なれば、想起する景観のイメージも異なる可能性は考えられる。つまり安曇野市内のどの地域に住んでいるのかによって、イメージされる景観が異なるのではないか。あるいは、居住期間の長さによっても異なるかもしれない。安曇野居住期間が長くなればなるほど、その人にとって景観は、当たり前なものとなり、安曇野の景観として意識されなくなってくるかもしれない。このように、安曇野の景観のイメージは、居住地や居住期間などによって影響を受けていると考えるこ

とができる。

第2の仮説は、人々の景観のイメージは共通している、というものである。安曇野の風景と言えば、目の前に水田が広がっていて、その奥に北アルプスの山々がそびえているという風景を思い浮かべる人が多いのではないだろうか。安曇野に住む多くの住民が日常的に見ている風景ではなく、マスメディアによって作られたイメージに過ぎないのかもしれない。つまり、ある特定の、つくられた安曇野の風景・景観というイメージを共有しているのかもしれない。

我々が景観の問題を取り上げてきた動機は、先にも述べたように、景観をめぐる合意の難しさの原因を探ることであり、その考察の中で、イメージされる景観の多様性の問題へとたどり着いた。その点を考慮すれば、単に安曇野の景観イメージを明らかにするだけではなく、景観イメージの違いが、景観評価とどのように関連しているのかを検討する必要がある⁵⁾。

そこで、本稿では次のような課題を設定して分析をしていきたい。

(1) そもそも安曇野の景観とは何なのか。

人々が想起する安曇野の景観が何によって構成されているのかを明らかにする。具体的には、農村景観を構成すると考えられる19の構成要素について、安曇野の景観を構成する要素として何が重要視されているのかについて検討する。

(2) 安曇野の景観の特徴とは何なのか。

①安曇野の景観を特徴付ける要素は何なのか。

19の構成要素から、安曇野の景観の特徴を抽出すると、どのような要素にまとめることができるのかを明らかにしていく。

②人々が認知している「安曇野の景観」には多様性があるのか、ないのか（共通した「安曇野景観」というものがあるのか）。

具体的には、居住地域によって、安曇野景観の構成に違いがあるのかを明らかにする。居住地域に焦点があるが、それ以外にも性別、年齢、居住地域についても検討する。

(3) 景観の構成要素と景観評価はどのような関連があるのか。

何を安曇野の景観と考えているのかによって、安曇野の景観評価は異なるのかを明らかにする。

以上の課題に答えるために、本稿では2010年におこなった安曇野市民を対象とした調査(安曇野市民の生活と意識に関する調査)のデータに基づいた分析をおこなう。

調査の概要は以下の通りである⁶⁾。

調査名：安曇野市民の生活と意識に関する調査⁷⁾

母集団：2010年3月1日現在、安曇野市に居住する20歳以上74歳以下の男女

サンプリング：住民基本台帳から108の行政区ごとに10標本ずつ系統抽出

調査対象者：1080名

調査期間：2010年3月8日～23日

有効回答票：580 (有効回答率 53.7%)

調査方法：郵送自記式、一部web回答

以下では、次のような構成によって議論を進めていく。第2節では、安曇野の景観の特徴を客観的に押さえておくために、安曇野の5地区(旧5町村)の違いと共通性をいくつかの指標から見ていく。それを踏まえた上で、第3節では、安曇野住民による安曇野景観の構成要素について検討する。その中で、地域差があるのかについて検討していく。第4節では、景観の構成要素の類似性と組み合わせを検討する。さまざまな景観要素によって構成される安曇野景観の特徴を明確にするために、安曇野景観が、より抽象的なレベルにお

いてどのような要素によって構成され、そうした構成要素はどのように組み合わせられているかを明らかにする。そして、その組み合わせに地域差があるのか、さらに地域差は何に起因しているのかを議論する。第5節では、人々によって想起されている安曇野の構成要素の違いが、安曇野の景観評価に影響しているのかを検討する。最後に第6節において、全体をまとめる。

2. 安曇野市の現況

安曇野市は、長野県の中央部に位置し、2005年10月に豊科町、穂高町、三郷村、堀金村、明科町の5町村が合併して誕生した。人口は、2010年2月現在(今回の調査時点)で、99,230人であり、県内6番目の人口となっている。1970年から2005年までの人口増加率は、46%と高く、人口問題研究所の試算によれば、2000年から2030年までに大きく人口が増加すると予測されている⁸⁾。工業出荷額が県内第一位の工業の中核都市であるのと同時に、安曇野と呼ばれる平坦な扇状地を利用して、農業が盛んにおこなわれている。りんご栽培、たまねぎなどの野菜、ワサビ、米の耕作がおこなわれており、これらが形作る田園景観、および常念岳を中心とした雄大な北アルプスの山岳景観が、現在でも美しい景観を作り出している。

安曇野市は5つの町村が合併してつくられたことから、安曇野といっても、単一、あるいは統一した特徴があるというよりも、さまざまな異なる特徴を持つ地域の連合体として安曇野が構成されているといえる。

5つの地区の特徴について、簡単に押さえておくことにしよう。

まず1955年(昭和30年)以降の人口についてみると、穂高地区と豊科地区の人口が多い(図2)。特に1970年以降に両地区の人口が

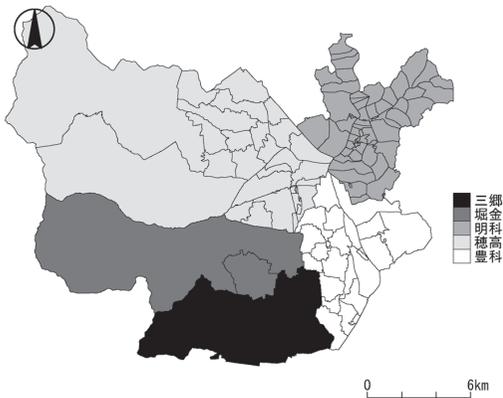


図1. 安曇野市

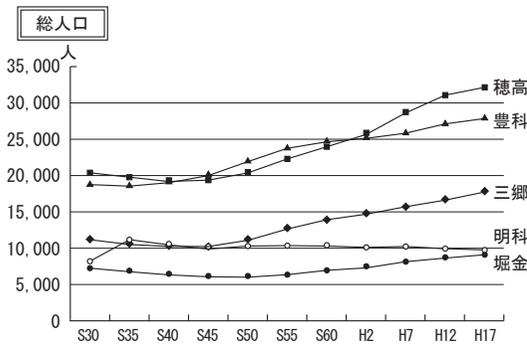


図2. 安曇野市の人口の推移 (『2010 安曇野市の統計』より転載)

増加している。三郷地区も1970年以降増加しているが、穂高地区、豊科地区に比べると1万人以上人口が少ない。掘金地区と明科地区は、人口があまり大きく変化しておらず、1万人前後で推移している。

次に産業についてみると⁹⁾、第一次産業従事者の比率は掘金地区が最も高く24.2%、続いて三郷地区の21.9%となっている。豊科、穂高、明科の3地区は12~13%程度と低い。第二次産業については、明科地区が最も高く56.4%、豊科、穂高地区がそれぞれ52.7%、52.4%、三郷、掘金地区はやや低い。第三次産業についてはあまり大きな違いはなく、豊科、穂高地区がやや高く34%強、もっとも低

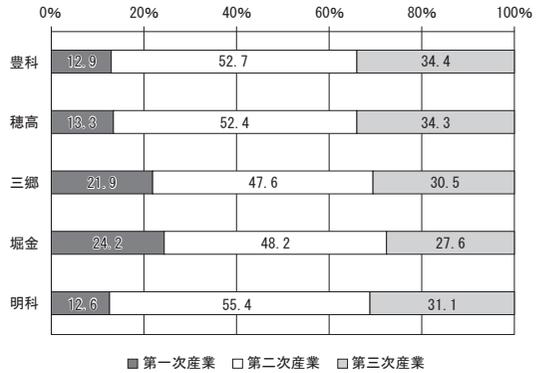


図3. 安曇野市の産業

い掘金地区で27.6%となっている。全国の構成比率は、2000年現在では第一次産業が5.0%、第二次産業が25.9%、第三次産業が67.3%となっていることと比較すると、安曇野市全体が第一次産業、第二次産業に傾斜していることがわかる(図3)。

安曇野市の文化財についても見ておきたい(表1)。市の有形文化財については、明科地区が32(うち屋外のものは17)と最も多く、史跡は豊科地区(10カ所)、美術館、ギャラリーは穂高地区(17カ所)、道祖神は穂高地区、明科地区、豊科地区が多い。また神社、仏閣は明科地区が多い。

農地については、図4に2000年と2005年の耕作面積とその内訳を示している。穂高の耕作面積が最も多く、続いて三郷、豊科、掘金、

表1. 安曇野市の文化財

	豊科	穂高	三郷	掘金	明科
市有形文化財	0	7	18	6	32
うち屋外文化財	0	3	13	4	17
市史跡	10	5	2	0	1
美術館、ギャラリー	4	17	0	1	0
道祖神	141	205	81	72	164
神社仏閣	16	19	20	7	27

(『2010年 安曇野市統計』より)

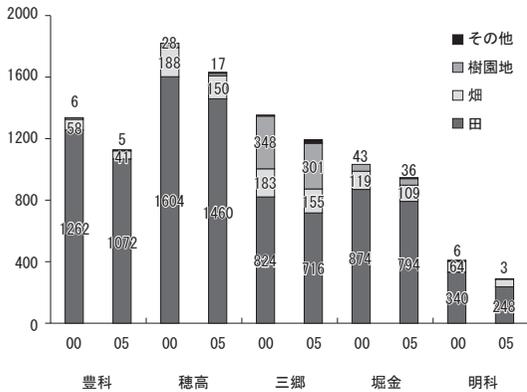


図4. 安曇野市の耕作面積

明科となっている。豊科は田が大半、穂高、堀金、明科は畑もある程度ある。そして三郷は樹園地（リンゴ畑）が多いことがわかる。

3. 安曇野景観の構成要素

3.1. 安曇野景観の構成要素

まず、安曇野市民が「安曇野の景観」を形成する要素の全体像を明らかにしていこう。調査では、次のような質問をしている。

〈質問文〉安曇野市の景観はいろいろなものから成り立っています。以下のものうち、安曇野市の景観として「欠かせない」と思われるものはどれでしょうか。

(1)空	(8)わさび田	(15)古民家
(2)山脈(やまなみ)	(9)屋敷林	(16)観光施設
(3)森	(10)神社	(17)鉄道
(4)川	(11)道祖神	(18)公民館
(5)田	(12)記念碑	(19)美術館
(6)畑	(13)水路、堰(せき)	(20)その他
(7)りんご畑	(14)山間集落	

20の選択肢の中から、当てはまる要素をすべて選んでもらった。その結果、安曇野市全体における、それぞれの要素の選択比率をまとめると図5となる。

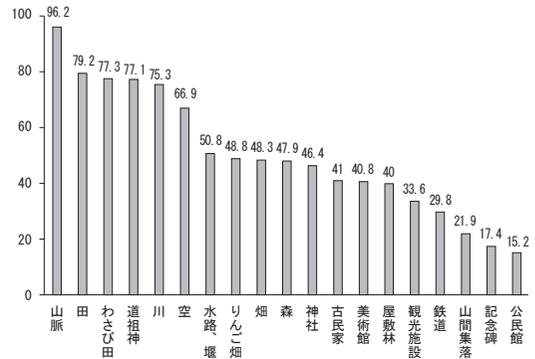


図5. 安曇野市民による安曇野景観に必要な構成要素

図5から、まず最も多くの人に選ばれているのは山脈であり、96.2%にも昇った。ほとんど全員の回答者が山脈は安曇野の景観を形成する要素として必要であると考えている。続いて、田、わさび田、道祖神、川、空と続いている。この6要素については2/3以上の回答者が選択していることから、安曇野景観を構成する基本的な要素であることが伺える¹⁰⁾。残りの13の要素については、住民の半分かそれ以下の人々しか必要な要素であると考えていない。

全体の比率から、特に注目すべき特徴は3つあるだろう。第1に、建物の比率が低い。神社、古民家、美術館、観光施設などの比率はそれほど高くない。つまり、安曇野の景観にとって建物はあまり重要視されていないことが伺える。第2に、道祖神の比率は高いが記念碑は低い。おそらく道祖神と記念碑は、景観の形成要素という観点からすると、あまり大きな違いがあるようには思えない。しかし道祖神の比率は記念碑に比べると4倍以上も高くなっている。また道祖神は、特に安曇野だけの特徴的なものというわけではなく、広く全国的に分布しているものである。しかし、道祖神が安曇野の景観に欠かせないと考えている安曇野市民が多いのである。第3に、

畑より田のほうが、比率が高い。これは、全耕作面積の82.9%が田、9.6%が畑である（『2010 安曇野市の統計』）からも、安曇野の景観にとって、水田こそが特徴的であることを示している。

3.2. 景観構成要素の地域間比較

次に、構成要素に関して地域間比較をおこなってみたい（表2参照）。

まず、山脈についてはどの地域においても、最も多くの人々が挙げており9割を超えている。地域に関係なく、山脈が安曇野景観の特徴であると認識されていることがわかる。次に田については、三郷地区と堀金地区で比率が高

く、明科、豊科、穂高の3地区でやや低くなっている。これは、三郷地区と堀金地区の第一次産業従事者比率が高いことも関係しているだろう。わさび田については、穂高地区で82.3%と高く、逆に堀金地区では68.9%と低い。これは先に見たように、穂高地区は作付面積が37haと最も多く、堀金地区にはわさび田がないことによると考えられる。逆に不思議なのは、堀金地区にはわさび田がないにもかかわらず、7割もの人たちがわさび田を選んでいることである。次に道祖神は、穂高地区が82.3%、三郷地区が81.2%と高くなっている。なお、道祖神の数でみると、先に見たように、三郷地区は道祖神の数が少な

表2. 安曇野景観要素の地域差

明科	三郷	豊科	堀金	穂高					
山脈	94.7	山脈	97.6	山脈	95.4	山脈	93.4	山脈	96.2
川	88.4	田	83.5	田	76.8	田	86.9	わさび田	82.3
田	76.8	道祖神	81.2	わさび田	76.2	道祖神	75.4	道祖神	79.1
わさび田	76.8	りんご畑	77.6	川	75.5	川	73.8	田	75.9
道祖神	75.8	わさび田	74.1	道祖神	72.8	空	70.5	川	73.4
空	57.9	空	68.2	空	65.6	わさび田	68.9	空	70.3
森	49.5	川	62.4	水路、堰	51.0	水路、堰	65.6	神社	55.7
畑	49.5	畑	54.1	りんご畑	44.4	畑	55.7	美術館	55.1
水路、堰	49.5	屋敷林	50.6	森	43.0	りんご畑	47.5	森	53.8
神社	47.4	水路、堰	50.6	畑	43.0	神社	44.3	畑	45.6
古民家	46.3	森	47.1	古民家	39.1	古民家	42.6	りんご畑	44.9
屋敷林	45.3	古民家	47.1	屋敷林	36.4	森	41.0	水路、堰	44.9
美術館	44.2	神社	45.9	神社	36.4	屋敷林	37.7	観光施設	38.6
りんご畑	35.8	観光施設	34.1	鉄道	31.8	観光施設	31.1	屋敷林	34.8
観光施設	34.7	鉄道	32.9	美術館	31.8	美術館	31.1	古民家	34.8
山間集落	31.6	美術館	31.8	観光施設	27.8	山間集落	26.2	鉄道	28.5
鉄道	31.6	山間集落	20.0	山間集落	21.2	鉄道	19.7	山間集落	15.8
記念碑	25.3	公民館	16.5	記念碑	19.9	公民館	19.7	記念碑	11.4
公民館	20.0	記念碑	14.1	公民館	13.2	記念碑	18.0	公民館	11.4

い。それにもかかわらず、道祖神の比率が高くなっており、興味深い。

地域別に特徴的な要素もみておくことにしよう（図6参照）。図6は、全体の平均値からの偏差をあらわしている。明科地区は川、山間集落、記念碑の比率が高く、りんご畑の比率が低い。三郷地区はりんご畑、屋敷林の比率が高く、川や美術館の比率が低い。豊科地区は、神社や美術館の比率が低い。堀金地区は、水路・堰の比率が高く、わさび田、美術館、鉄道の比率が低い。穂高地区は、神社と美術館の比率が高い。こうした比率の違いは、各地区の特徴と合致していると考えられる。

以上から、安曇野景観の構成要素は、地域によって共通する要素と異なる要素があることがわかる。山脈、田、わさび田、道祖神などは、地区による違いは多少あるものの、全体として高い比率である。その一方で、リンゴ畑、川、水路・堰、美術館、屋敷林などは地域による違いが大きい。これらの要素は特定の地域に偏って存在しているためと考えられる。つまり、このため安曇野市民の景観要素の選択には、2つの要因があるのではないかと考えられる。第1に、住んでいる地域の

影響である。居住している地域から見える景観こそが安曇野の景観であるという認識があると考えられる。ただ安曇野の景観はそれだけではない。つまり第2に、安曇野の景観というイメージがあると考えられる。自分の地域からは見えない景観であるが、安曇野を代表する要素として認識されているものがある。

そこでさらに、それぞれの構成要素の選択について、地域差があるのかについてロジスティック回帰分析によって検討してみることにした。

説明変数として、性別（女性を基準変数）、年齢、居住年数、地域（穂高地区を基準変数）を取り上げる。

分析の結果が表3である。表は、各行がそれぞれ一つの分析の結果をあらわしている。表からまずわかることは、全体として説明力が低い。つまり、これらの説明変数によって景観要素の選択理由の大部分は説明できないということである。しかし、まったくないわけではなく、地域差もみられる。

詳細に見ていくと、地域の影響がない構成要素は、山脈、田、道祖神、公民館である。これらの要素については、どの地域にとってもなじみ深い要素であるため、地域差が出ない。それ以外の要素から、それぞれの地区の特徴をまとめると、まず明科地区は、空はマイナス、山間集落と川はプラスに影響を与えている。これは、山間集落が多いこと、犀川が近くを流れていることによると考えられる。三郷地区は、りんご畑が広く広がっていることから、りんご畑においてプラスの影響が見られる。豊科地区は、神社仏閣が必ずしも少ないわけではないにもかかわらず、マイナスになっている。堀金地区は、水路、堰においてプラスとなっている。穂高地区は、美術館が集中していることからプラスの影響（他の4地区がマイナスの効果があることからわか

	明科	三郷	豊科	堀金	穂高
山脈	-1.5	1.4	-0.8	-2.8	0.0
田	-2.4	4.3	-2.4	7.7	-3.3
わさび田	-0.5	-3.2	-1.1	-8.4	5.0
道祖神	-1.3	4.1	-4.3	-1.7	2.0
川	3.1	-12.9	0.2	-1.5	-1.9
空	-9.0	1.3	-1.3	3.6	3.4
水路、堰	-1.3	-0.2	0.2	14.8	-5.9
りんご畑	-13.0	28.8	-4.4	-1.3	-3.9
畑	1.2	5.8	-5.3	7.4	-2.7
森	1.6	-0.8	-4.9	-6.9	5.9
神社	1.0	-0.5	-10.0	-2.1	9.3
古民家	5.3	6.1	-1.9	1.6	-6.2
美術館	3.4	-9.0	-9.0	-9.7	14.3
屋敷林	5.3	0.6	-3.6	-2.3	-5.2
観光施設	1.1	0.5	5.8	-2.5	5.0
鉄道	1.8	3.1	2.0	-10.1	-1.3
山間集落	9.7	-1.9	-0.7	4.3	-6.1
記念碑	7.9	-3.3	2.5	0.6	-6.0
公民館	4.8	1.3	-2.0	4.5	-3.8

図6. 地区別、平均比率との偏差

表3. 景観の構成要素のロジスティック回帰分析結果

	性別	年齢	居住年数	明科	三郷	豊科	堀金	-2対数尤度	Cox-Snell R ²	Nagelkerke R ²
空	**(-)			*(-)				598.564	0.040	0.057
山脈								167.910	0.013	0.043
森						+(-)	+(-)	685.074	0.016	0.021
川	*(-)	*(+)		*(+)	+(-)			521.363	0.049	0.074
田								500.778	0.010	0.016
畑	**(-)				+(+)			674.121	0.037	0.049
リンゴ畑	**(-)	+(+)		+(-)	**(+)			644.901	0.092	0.123
わさび田	**(-)						+(-)	501.174	0.040	0.062
屋敷林		**(+)			*(+)			655.616	0.039	0.052
神社			*(+)	+(-)		**(-)		670.250	0.043	0.057
道祖神								529.354	0.010	0.015
記念碑				*(+)		*(+)		456.804	0.017	0.028
水路、堰		**(+)					**(+)	669.323	0.046	0.061
山間集落				*(+)				511.953	0.019	0.030
古民家					+(+)			671.734	0.012	0.016
観光施設	+(-)					*(-)		622.025	0.027	0.037
鉄道	*(-)	**(+)					+(-)	585.820	0.049	0.069
公民館								396.236	0.024	0.044
美術館	+(-)			*(-)	**(-)	**(-)	**(-)	647.746	0.061	0.081

+ p<0.10, * p<0.05, ** p<0.01 +は正の影響、-は負の影響

る)が見られる。

以上、ロジスティック回帰分析の結果からも、ある程度、地域と構成要素の間には関連があることが読み取れる。全体の傾向としては、その地域に数多く存在している要素については、景観要素として選択される傾向があることがわかる。そのことは、景観のイメージというものが、ある程度日常的に見えているものによって、形成されていることを示している。

4. 景観構成要素の類似性と組み合わせ

4.1. 景観構成要素の類似性

これまでの分析から、地域による構成要素の違いがある程度見えてきた。ただ上記の分析では19の構成要素をそれぞれ個別に分析しており、構成要素間の関係については、なんらわかっていない。

景観とは、当然のことながら個々の構成要素が独立に景観を形成しているわけではない。構成要素は互いに関連し合いながら、全体として一つの調和した景観を形成しているはず

である。そうであるならば、19の構成要素の関連をみていく必要がある。そこで、次に19の構成要素のうち、どの構成要素とどの構成要素が同時に選択されやすいのかについて分析していくことにしよう。つまり安曇野景観を構成する要素のセットとはどのようなものなのかを明らかにしていきたい。そのセットに共通性があるのか、あるいは地域などによって多様性があるのかを検討していくことにしたい。

まず19の構成要素について、コレスポネンス分析をおこなった。このうち2次元まで

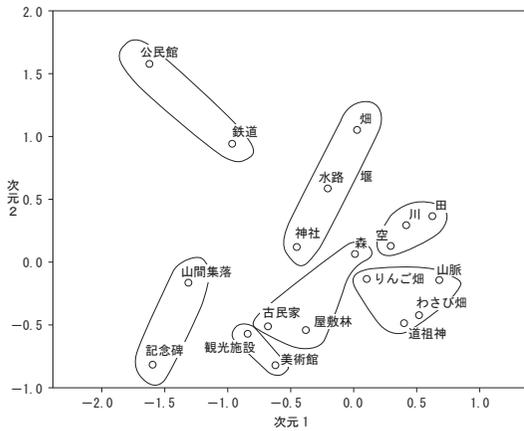


図7. コレスポネンス分析結果

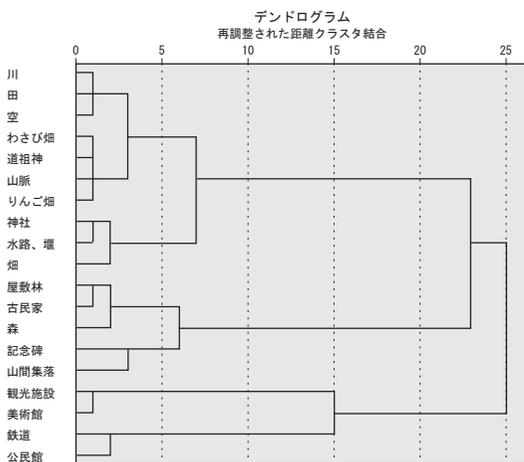


図8. 景観要素のクラスター分析デンドログラム

の配置は図7のようになっている。その上で、その3次元までの得点をクラスター分析によって、要素のクラスター化を試みる。クラスター分析によって作成されたデンドログラムが図8である。

図8からおおよそ7つのクラスターに分類することができる。

1. 空、田、川（農村遠景クラスター）
2. 山脈、りんご畑、わさび田、道祖神（農村近景クラスター）
3. 畑、神社、水路、堰（農村中間景クラスター1）
4. 森、屋敷林、古民家（農村中間景クラスター2）
5. 記念碑、山間集落（山間クラスター）
6. 観光施設、美術館（観光施設クラスター）
7. 鉄道、公民館（生活施設クラスター）

「空、田、川」は、観光ガイドにも載っているような自然、風景で、いわゆる安曇野らしい景観を構成している要素であるといえるだろう。空と水の張った田、そして犀川は、「青」というイメージを想起させる。そしてこれらの要素は、遠景としての安曇野景観であり、この3つの要素によって典型的な安曇野景観を構成することができる。次に「山脈、りんご畑、わさび田、道祖神」は、それぞれの要素が安曇野の特色となる要素である。山脈はほとんど全員が取り上げていることから、ひとまず除いて考えると、他の3つの要素は、安曇野を代表する観光資源としての要素である。しかし、それぞれの要素はそれぞれ個別に景観を構成する要素である。つまり、りんご畑とわさび畑と道祖神を同時に見ることはできない。そしてそれぞれの要素は、それぞれ単体で景観を構成していることが多く、他の要素と同時に景観を形成することが少ない。つまり近景としての安曇野景観ということができる。「畑、神社、水路、堰」は、農村景

観を構成する要素として考えることができるだろう。畑は、田とともに安曇野の景観を構成する要素である。しかし先にも見たように、田に比べて耕作面積は少なく、安曇野の景観の主たる要素とはいえない。また神社（仏閣も含む）は、市内全域に90ほどあるが、やはり安曇野の景観をそれ自体で形成するというよりは、田園景観を形成するための一つの要素として考えられる。同様に水路、堰についても、田園の中に溶け込むことによって一つの景観を形作っていると考えられる。そしてこれらの要素は、遠景から眺める景観の要素というよりは、やや近くから眺められる中間景という景観をつくりだす要素であると考えられる。同様に「森、屋敷林、古民家」も、農村景観を構成する要素として考えることができるだろう。田や畑に近接、あるいは含まれる要素として森、屋敷林、古民家があると考えられる。つまりこれらの要素も、神社や水路などと同様に「空、田、川」のような遠景ではないが、「道祖神」のような近景でもない。また、「りんご畑、わさび畑」のような単体で景観を構成する要素でもない。中間的な距離をつくりだし、また田や畑によって構成される景観と一体化することによって一つの景観を作り出す要素であるといえるだろう。

一方「記念碑、山間集落」、「観光施設、美術館」は地域性のある構成要素である。「記念碑、山間集落」は、主として明科地区に偏在している景観である。記念碑は明科地区に最も多く、また山間集落もほぼ明科地区にしか見られない。また「観光施設、美術館」は、穂高地区に多い、観光資源としての建造物であり、近景としての景観といえることができる。それぞれの要素を景観として位置づけるといよりは、安曇野観光を構成する要素という側面がある。

さらに「鉄道、公民館」は、景観を構成する要素というよりは、生活の中で利用する施設であり、毎日の生活に関わる要素であり、生活と結びついた景観といえることができるだろう。安曇野らしい景観の構成要素ではないが、地域住民にとってはなじみ深い景観であるといえることができるだろう。

以上から、景観の構成要素はいくつかの軸によって構成されていると予想することができる。

第1に、遠景－近景という軸である。空、田、川、あるいは山脈などは、遠景としての景観である。それに対して、道祖神、水路、堰、記念碑などは近景としての景観である。第2に、自然－人工物という軸である。空、川、山脈などは、自然としての景観であるに対して、記念碑、山村集落、観光施設、美術館などは人工物としての景観である。第3に、山－平野という軸である。山脈、山間集落は山という景観であり、田、畑、水路、川などは平野にある景観である。第4に、青（水）－緑（野）という軸である。空、田、川などは青をイメージする景観であり、森、畑、屋敷林などは緑（野）をイメージする景観である。こうした景観を構成するいくつかの軸が重なり合うことによって、景観の構成要素がクラスターに分類されると考えられる。

4.2. 景観構成要素の組み合わせ

次に、7つの構成要素クラスターの組み合わせを検討していく。先にも述べたように、景観はさまざまな要素の組み合わせによって成立している。7つの構成要素クラスターについても、単独で景観を構成することもあり得るが、他のクラスターとの組み合わせによって景観を構成することもある。また安曇野の景観として水をイメージする人は、川をイメージすると同時に水路をイメージするか

もしれず、つまり特定のクラスターをイメージする人は、別のクラスターもイメージしやすいということがあるかもしれない。

7つのクラスターの組み合わせについて、それぞれ景観を構成する(1)、構成しない(0)となるので、理論的には $2^7=128$ 通りあるが、実際には48通りの組み合わせがみられた。このうち上位15番目までの比率を表したのが、表4である。なお上位15パターンをあわせると全体の84.4%にあたる。

全体で最も多いパターンは、1111111というすべての構成要素クラスターであり、13.3%であった。続いて、1111000(農村遠景+中間景+近景)、1100000(農村遠景+近景)、1111010(農村遠景+中間景+近景+観光施設)、1111011(農村遠景+中間景+近景+観光施設+生活施設)というパターンが続いている。ここで注目すべき点は、農村景観

について、いくつかのクラスターを同時に選択しているということである。つまり、安曇野の景観は、遠景だけではないし、近景だけでもない。さらに、中間景と近景だということもなく、遠景と組み合わせられるということである。この結果は、我々が観光ガイドなどからイメージされる安曇野景観と合致しており、安曇野市民の多くにも共有されているということである。

次に地域別でみると、地域による違いがかなりあることがわかる。1111111(すべての構成要素を含むパターン)を除くと、明科地区は1100000(遠景+近景)、三郷地区、豊科地区、堀金地区は1111000(農村遠景+中間景+近景)、穂高地区は1111010(農村遠景+中間景+近景+観光施設)が多い。ここから、三郷、豊科、堀金の各地区は、いわゆる安曇野の農村景観の遠景、中間景、近景を

表4. 5地区別景観構成要素パターン

	1	2	3	4	5	6	7	明科	三郷	豊科	堀金	穂高	合計
1	1	1	1	1	1	1	1	22.0	16.1	9.6	12.1	10.4	13.3
2	1	1	1	1	0	0	0	7.0	13.8	10.9	15.2	7.4	10.1
3	1	1	0	0	0	0	0	13.0	4.6	9.0	6.1	7.4	8.2
4	1	1	1	1	0	1	0	7.0	3.4	3.2	6.1	12.9	7.0
5	1	1	1	1	0	1	1	3.0	8.0	5.8	6.1	8.6	6.5
6	1	1	1	0	0	0	0	5.0	8.0	4.5	13.6	4.9	6.3
7	1	1	0	1	0	0	0	5.0	8.0	8.3	3.0	4.3	5.9
8	1	1	1	1	1	1	0	6.0	2.3	4.5	9.1	6.7	5.6
9	0	0	0	0	0	0	0	5.0	2.3	3.2	7.6	4.9	4.4
10	1	1	1	0	0	1	0	1.0	3.4	5.8	1.5	6.7	4.4
11	1	1	1	1	0	0	1	1.0	6.9	4.5	1.5	1.8	3.1
12	1	1	1	1	1	0	0	6.0	4.6	2.6	0.0	1.2	2.8
13	0	1	0	0	0	0	0	2.0	1.1	4.5	0.0	2.5	2.4
14	1	1	0	0	0	1	0	2.0	3.4	1.3	3.0	3.1	2.4
15	1	1	1	0	0	1	1	0.0	0.0	3.2	0.0	3.7	1.9

すべて含んだ景観のパターンが安曇野の景観として認識している者が多い。それに対して、明科地区は山間集落が多いため、中間景がないパターンが多くなっている。また穂高地区は観光施設が含まれるパターンが多く、明科、穂高はそれぞれの地区の特徴を反映した景観が選択されている。

さらに、各地区のパターンの比率から、各地区の間の距離行列を求め、多次元尺度構成法によって2次元空間にプロットして見た。その結果が、図9である。図9を見ると、一目瞭然であるが、多次元尺度構成法によってつくられたプロット図は、図1の安曇野の地形図とかなり類似した位置関係となっている。このことは、安曇野の景観のパターンが、地理的な位置によって規定されていることの傍証となるだろう。さらに、穂高地区と豊科地区は近くに位置しており、他の3地区が離れていることも見て取れる。穂高地区と豊科地区は、似たような景観イメージパターンを持っているのに対して、他の3地区は、それぞれ異なるパターンを持っていることがわかる。このことは、いわゆる観光地域である穂高地区と豊科地区が安曇野らしいイメージを持ちやすいのに対して、他の3地区は安曇野らしいイメージを持ちつつも、それぞれ独自

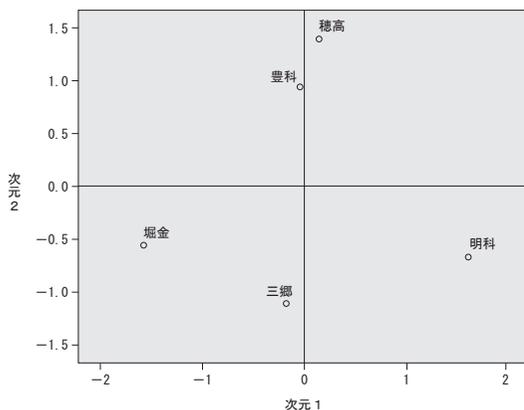


図9. 多次元尺度法による地域のプロット

のイメージパターンも持っていることが推測される。

以上の結果を確認しておこう。

(1) 安曇野景観を構成する要素として、山脈、田、わさび田、道祖神、川、空が多くの人々に選択されている。

(2) 景観構成要素の選択には、地域差がある。しかしそれは必ずしも大きくない。

(3) 安曇野景観要素は、7つの景観に分類される。

(4) 7つの景観の組み合わせに、地域差がある。特に明科地区と穂高地区では他地域とは異なる組み合わせが存在する。

(5) 7つの景観の組み合わせの特徴から、5地区の間の近接性を求めたところ、地理的な距離と類似した結果が得られた。

まとめると、安曇野市民によってイメージされる安曇野の景観には、地域差が存在し、それは地理的条件と深い関連があるとまとめられる。当然の結果とも言えるが、その一方で、実際にはその規定力が大きいとは言えないことも明らかとなった。

5. 景観の認知と景観評価の関係

次に、本稿の第2の課題を検討していくことにしよう。安曇野の景観は、安曇野市民にとって肯定的に捉えられている。それは、過去の調査において、一貫してそのような結果が出ている。しかし、その一方で、景観の維持、保全という観点からは、必ずしも一致した意見があるわけではなく、開発や利便性、あるいは個人の所有権といった問題とも絡み、合意形成は必ずしも容易ではない。本稿ではその一つの要因として、安曇野の景観としてイメージするものの違いがあるかもしれないという予想を立てた。そこで、景観として何を思い浮かべるかという違いが、景観の評価に関わっているのかを明らかにしていくこと

にしよう。

安曇野景観の評価の変数として、美しさ、明るさ、好意（好きか嫌いか）、変化（変えたいか変えたくないか）を取り上げる。

これらの景観評価への影響要因として、

- (1) 景観構成クラスター
- (2) 地区
- (3) 属性（年齢、性別）
- (4) 居住年数

の各変数を検討することとした。

多変量解析の前に、景観評価の分布について確認しておきたい。図10は、景観評価に関する4つの項目の分布を示している。図からわかるように、肯定的な評価に偏っていることがわかる。

それでは、景観評価への影響を、重回帰分

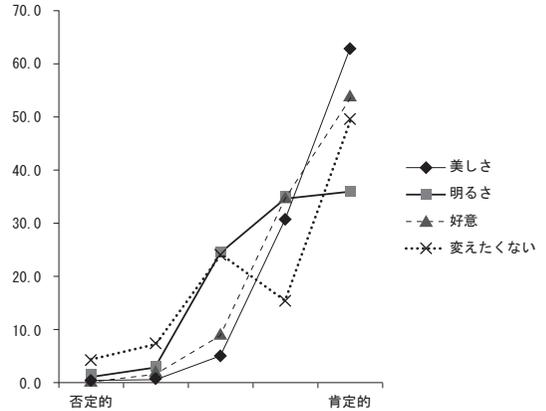


図10. 景観評価

析によってみていく。

分析結果をまとめたのが、表5である。

まず全体の傾向として、説明率 (R^2) が低い。つまり、今回の分析で検討した説明変数

表5. 安曇野景観評価の規定因

	美しさ	明るさ	好意	変化
年齢	0.023	0.206 **	0.023	-0.047
性別	-0.001	-0.021	-0.032	0.073
明科	0.082	0.098 +	0.044	0.039
三郷	0.068	-0.030	0.021	-0.057
豊科	0.110 *	0.084	0.066	0.006
堀金	0.025	0.029	0.058	-0.018
居住年数	-0.023	-0.068	0.025	0.056
農村遠景	0.067	0.118 *	0.026	-0.092
農村近景	0.107 *	-0.004	0.050	0.025
農村中間景 1	-0.054	0.003	0.020	0.025
農村中間景 2	-0.012	0.008	0.033	-0.046
山間景観	0.053	0.051	0.003	-0.052
観光施設	0.106 *	0.045	0.106 *	0.012
生活施設	-0.015	0.042	-0.033	0.079 +
調整済み R^2	0.023	0.059	0.002	0.001
N	554	548	547	536

** $p < 0.01$, * $p < 0.05$, + $p < 0.10$

では説明ができないということである¹¹⁾。

次に、それぞれの評価についてみていくと、まず「美しさ」は、豊科地区が穂高地区に比べてプラスに評価している。また景観構成クラスターについては、農村近景と観光施設がプラスに有意となっている。つまり、近景を挙げている人、あるいは観光施設を挙げている人は美しいと回答している。次に「明るさ」は、年齢の効果が大きい。年齢が高いほど、明るいと感じている。また明科が10%水準で有意となり、農村遠景も有意である。

「好意」については、ほとんどの変数が影響しておらず、観光施設クラスターのみが有意となっている。「変化(変えたくない)」については、どの変数もまったく影響していない。

景観の構成要素については、明るさについてのみ影響しているが、全体として影響力は小さい。

6. 結論

本稿では、2つの問いについて検討してきた。

第1に、イメージとしての安曇野景観を構成する要素はどのようなものであるのか、そしてその要素について、地域差はあるのかという問いである。この問いについては、本稿の分析から大きく2つの知見としてまとめることができるだろう。一つは、安曇野景観を構成する要素に、地域差があるということである。そしてその地域差は、地域の地理的な位置によって特徴付けられるということである。もう一つは、その規定力は大きくないということである。つまり、地域差を超えた共通性が高いということである。96.2%もの回答者が景観要素として山脈を挙げているように、多くの住民によって共通した構成要素がある。つまり、イメージとしての安曇野景観は、地域による共通性と差異性を併せ持って

いるということである。このことは、イメージとしての安曇野景観がどのように形成されているかについての示唆を与えてくれる。

安曇野景観とは、一方でさまざまなメディアを通じて形成されている可能性がある。

ここで一つ例を挙げよう。2005年に穂高町でおこなった調査(村山・渡邊編 2006)において、穂高町のイメージとして、「日本の原風景」、「光と水と緑の郷」、「暖かな人情」、「心安らぐアートの地」、「里山ののどかさ」、「雄大な山々」、「ガラスのような澄み切った青空」がどれほど当てはまるかを尋ねた。これらの言葉は、すべて安曇野に関する観光ガイド、パンフレットで使われている言葉である。このうち景観に関する「日本の原風景」、「光と水と緑の郷」、「雄大な山々」、「ガラスのような澄み切った青空」については、「あてはまる」、「まああてはまる」をあわせると、「光と水と緑の郷」、「雄大な山々」は9割を超えており、「光と水と緑の郷」は9割弱、「日本の原風景」はやや少ないが、それでも7割を超えている。もちろん、観光ガイドに書かれているから、イメージが形成されるのか、イメージがあるから観光ガイドで使用されているのかは厳密にはわからない。しかし、これほど多くの回答者があてはまると答えていることは、観光ガイドなどのメディアによるイメージが人々に影響していると考えることに、無理があるとは思えない。

そうすると、安曇野の景観とは、第一に実際見えているものとは別に作られた景観であるともいえるのではないか。しかし、第二に、それだけではなく、実際に見えているものによっても形作られている。2つのインプットから安曇野景観のイメージが作られていく。それは、景観保全や景観維持という側面から、背反する影響を与えるのではないかと考えられる。一方では、全体の合意が得やすいかも

しれない。つまり、多くの人々によって共有された景観イメージが作られていることにより、人々の間でそのイメージされた景観を保全する、維持することへの合意が得られやすいかもしれない。しかし他方でそれは具体性に欠ける議論に陥る可能性がある。そこでの議論はイメージされた景観を対象にしている可能性がある。それゆえ、具体的な、ある地域のある景観に関する議論にはつながらないかもしれない。さらに、景観イメージには地域差も認められている。景観イメージは具体的な地域状況の反映でもある。そうであるならば、景観に関する、より具体的、個別的な問題に遭遇したとき、逆に合意が難しくなってしまうかもしれない。

第2の問いは、安曇野の景観イメージが景観評価に影響しているかどうかを確かめることであった。これについては、影響はほとんど確認できなかった。その理由は、今回の調査で尋ねた景観評価に関する項目に対して、大部分の回答者が肯定的に回答しており、景観評価の違いが必ずしもうまく測定できていないことにあるかもしれない。しかし、そもそも景観イメージが景観評価に影響しているかどうかは、あまり重要ではないのかもしれない。

景観をめぐる合意の難しさは、最初にも述べたように、公共財としての性質と私有財としての性質の対立にある。そうすると、景観の構成要素として何を含めるかは、景観評価に影響しているというよりも、その構成要素が公共財的な要素なのか、私有財的な要素なのか、景観の保全や維持に対する意識に影響しているのではないかと考えられる。つまり景観の構成要素は、景観の財としての性質を規定しており、それが景観保全に対する意識に影響している可能性があるのではないかと考えられる。

以上、本稿では、安曇野の景観を構成する要素を手がかりに、安曇野景観とは何か、そして安曇野景観への評価は何によって規定されているのかを検討してきた。景観とは、なかなか捉えにくいものである。本稿では、その捉えにくさを、景観要素に切り分けることによって、回避し、景観の内実を明らかにしようとしてきた。それにより、ある程度、安曇野景観の特徴を明らかにすることができたに違いない。しかし、景観が何であるのかを十分に明らかにできたとは言えない。さらに、景観を保全、維持していくためのアイデアを明確に提示できたわけでもない。今後も引き続き、住民にとっての安曇野景観とは何なのか、そして住民にとって、よりよい景観のあり方、合意の手続きは何であるのかを検討していく必要があるだろう。そのためのヒントとして、安曇野景観に対する人々の認識、意識の研究は今後も必要となるであろう。

【注】

- 1) 1960年代以降の景観をめぐる法制度の流れについては、佐藤（2011）を参照。
- 2) 長野県では、長野市、小布施町、松本市、飯田市、高山町、佐久市、諏訪市、千曲市、茅野市、小諸市、安曇野市の11団体が景観行政団体となっている。
- 3) 例えば、生活景という考え方（佐藤2011）があるが、これは「無名の生活者、職人や子工匠たちの社会的営為によって熟成された自主的な生活環境の眺め」であり、「生活体験に基づいてヒューマナイズされた眺めの総体」（佐藤2011：35）として定義されている。こうした考えに基づいた景観のとらえ方は、本稿の景観のとらえ方と近い。
- 4) 景観の多様性については、例えば渡久地（2011）が、景観が物理的環境側の領域と心的環境側の領域の2つによって形成されていると述べていることから、何がどのように見えているかが個人によって異なることによって生み出されていると考えられる。
- 5) 景観構成要素と景観の印象評価の関連については、例えば萩内他（2007）、姫野他（2005）などを参照。
- 6) 調査結果の概要の一部は、中野・岡本・渡邊（2010）を参照。
- 7) 本調査は、信州大学人文学部と安曇野市との地域連

- 携協定に基づき、信州大学人文学部社会学研究室（村山研一教授）と関西学院大学社会学部生活環境研究会（渡邊勉・中野康人・岡本卓也）が共同でおこなった調査である。
- 8) 長野県内で2030年までの30年間で人口が10%以上増加する地域は、6地域（軽井沢町、佐久市、松川村、安曇野市、山形村、南箕輪村）に過ぎない。長野市や松本市を含む大部分の市町村は、人口が減少すると予測されている。
 - 9) 平成12年10月1日現在。
 - 10) 安曇野市では、2006年に安曇野市総合計画策定基礎調査として、「安曇野市市民意向調査」をおこなっている（安曇野市2008）。その中で「大切にしたい安曇野市の風景」を尋ねている。結果は、北アルプスの山岳風景が84.8%で最も高く、続いて水田の風景（54.8%）、わさび田（畑）の風景（26.7%）、山麓の森林風景（26.5%）、道祖神の風景（20.9%）、河川の風景（17.8%）、農家住宅のある集落の風景（13.9%）、屋敷林の点在する風景（11.5%）、水路・堰の風景（10.8%）、果樹・畑の風景（9.6%）となっている。この結果は、本稿のデータとかなりの類似性を持っていると見ることができる。
 - 11) R^2 の値が小さい理由として、分布がかなり偏っていることもありうる。

【文献】

- 安曇野市. 2008. 『安曇野市総合計画策定基礎調査 安曇野市市民意向調査報告書』
- 姫野由香・佐藤誠治・小林祐司・松尾沙央里・嶋田麻世. 2005. 「観光地における大規模景観の評価と景観構成要素の影響度」『日本建築学会学術梗概集』 pp.195-196.
- 栗本京子. 2005. 「景観は誰のものか—起伏ある公共性—からの解釈」『年報社会学論集』 18: pp.217-228.
- 栗田英治・松森堅治・山本徳司. 2007. 「景観構成要素と農業形態の変化からみた棚田景観の変容」『農村計画学会誌』 26: pp.239-244.
- 村山研一・渡邊勉編. 2006. 『地域活動と住民意識に関する穂高町民調査報告書』信州大学人文学部社会学研究室
- 村山研一・渡邊勉編. 2007. 『安曇野市の景観形成活動と景観の価値』信州大学人文学部社会学研究室
- 村山研一・渡邊勉・祐成保志編. 2008. 『田園地域におけるコミュニティ形成—安曇野市の農業、近隣関係とコミュニティ意識—』信州大学人文学部社会・情報学講座
- 村山研一・祐成保志・渡邊勉. 2010. 『安曇野の地域社会と景観に関する研究』信州大学人文学部社会・情報学講座
- 中野康人・岡本卓也・渡邊勉. 2010. 「景観の評価と構成要素—安曇野景観意識調査—」『関西学院大学先端社会研究所紀要』 4: pp.21-33.
- 荻内康雄・古賀靖子・三浦佳世・田上健一. 2007. 「街並みの景観構成要素と印象評価との関係」『日本建築学会大会学術講演梗概集』 pp.127-128.
- 佐藤快信. 2011. 「景観とまちづくり」『長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要』 9 (1): pp.31-40.
- 渡久地朝央. 2011. 「農村景観の評価に関する実証分析—北海道の農村を事例に—」『北海道大学大学院農学研究院邦文紀要』 32 (1): pp.7-59.
- 渡邊勉. 2008. 「景観という公共性—社会的ジレンマと公共性—」土場学・篠木幹子編『個人と社会の相克』ミネルヴァ書房: pp.175-200.
- 渡邊勉. 2008. 「農村景観の特性—安曇野景観の価値と地域ブランド—」『地域ブランド研究』 4: pp.145-172.
- 渡邊勉. 2009a. 「景観問題における他者—景観をめぐる権利と義務—」『関西学院大学先端社会研究所紀要』 1: pp.13-27.
- 渡邊勉. 2009b. 「景観問題からみる理論と実証」『社会学年報』 38: pp.17-30.

(受稿日 2011.12.9 掲載決定日 2011.12.19)

(わたなべ・つとむ/関西学院大学社会学部)

What Constitutes a Farm Village Landscape?: An Analysis of the Components of Azumino Landscape

WATANABE Tsutomu

[Abstract]

This paper examines the local residents' images of the landscape of the place in which they live, and the influences of their evaluation of the landscape on their images. From an analysis of the social survey on Azumino city in 2010, we obtain the following findings: (1) there are similarity and heterogeneity between local residents about the components of Azumino landscape contained in their images; (2) the landscape images of local residents do not influence the evaluation of landscape.

Keywords components of landscape, image of landscape, landscape evaluation